

女侠伝

岡本綺堂

青空文庫

I 君は語る。

秋の雨のそぼ降る日である。わたしはK君と、シナの杭州、かの西湖せいこのほとりの楼外ろうがい楼ろうという飯館はんかんで、シナのひる飯を食い、シナの酒を飲んだ。のちに芥川龍之介氏の

「支那遊記」をよむと、同氏もここに画舫がぼうをつないで、槐えんじゆの梧桐ごとうの下で西湖の水をながめながら、同じ飯館の老酒ラオチユウをすすり、生姜煮しょうがにの鯉を食つたとするされている。芥川氏の来たのは晩春の候で、槐や柳の青々した風景を叙してあるが、わたしがここに立寄つたのは、秋もようやく老いんとする頃で、梧桐はもちろん、槐にも柳にも物悲しい揺落ようらくの影を宿していた。

わたし達も好きで雨の日を択えらんだわけではなかったが、ゆうべは杭州の旅館に泊つて、きようは西湖を遊覧する予定になつていたのであるから、空模様のすこし怪しいのを覚悟の上で、いわゆる画舫なるものに乗つて出ると、果して細かい雨がほろほろと降りかかっ

て来た。水を渡つてくる秋風も薄ら寒い。型のごとくに蘇そしやう小小の墳ふん、岳かく王おうの墓ぼ、それからそれへと見物ながらに参詣して、かの楼外楼の下に画舫をつないだ頃には、空はいよいよ陰くもつて来た。さして強くも降らないが、雨はしとしと降りしきっている。漢詩人ならば秋雨蕭しやうしやう々とか何とか歌うべきところであろうが、我れわれ俗物は寒い方が身にしみて、早く酒でも飲むか、温かい物でも食うかしなければ凌がれないというので、船を出ると早々にかの飯館に飛込んでしまったのである。

酒をのみ、肉を食つて、やや落ちついた時にK君はおもむろに言い出した。

「君は上海で芝居をたびたび観たろうね。」

わたしが芝居好きであることを知っているので、K君はこう言ったのである。私はすぐにうなずいた。

「観たよ。シナの芝居も最初はすこし勝手違いのようだが、たびたび観ていると自然におもしろくなるよ。」

「それは結構だ。僕は退屈しのぎに行つてみようかと思うこともあるが、最初の二、三度で懲りてしまったせいかな、どうも足が進まない。」

彼はシナの芝居ばかりでなく、日本の芝居にも趣味をもっていない男であるから、それ

も無理はないと私は思った。趣味の違った人間を相手にしてシナの芝居を語るのは無益であると思つたので、わたしはその問答を好い加減にして、さらに他の話題に移ろうとする、きよようのK君は不思議にいつまでも芝居の話を繰返していた。

「日本でも地方の芝居小屋には怪談が往々伝えられるものだ。どこの小屋ではなんの狂言を上演するのは禁物で、それを上演すると何かの不思議があるとか、どこの小屋の楽屋には誰かの幽霊が出るとか、いろいろの怪しい伝説があるものだが、シナは怪談の本場だけに、田舎の劇場などにはやはりこのたぐいの怪談がたくさんあるらしいよ。」

「そうだろうな。」

「そのなかにこんな話がある。」と、K君は語り始めた。「前清の乾隆年間のことだそうだ。広東の三水県の県署のまえに劇場がある。そこである日、包孝肅の芝居を上演した。包孝肅は宋時代の名判官で、日本でいえば大岡さまというところだ。その包孝肅が大岡捌きのような段取りで、今や舞台に登って裁判を始めようとすると、ひとりの男が忽然と彼の前にあらわれたと思いたまえ。その男は髪をふりみだし、顔に血を染めて、舞台の上にならずくまって、何か訴えるところがあるらしく見えた。しかし狂言の筋からいうと、そんな人物がそこへ登場する筈はないから、包孝肅に扮している俳優は不思

議に思つてよく見ると、それは一座の俳優が仮装したのではなくして、どうも本物らしいのだ。」

「本物……幽霊か。」と、わたしは訊いた。

「そうだ。どうも幽霊らしいのだ。それが判ると、包孝肅も何もあつたものじゃない。その俳優はあつと驚いて逃げ出してしまった。観客けんぱくの眼には何も見えないのだが、唯ならぬ舞台の様子におどろかされて、これも一緒に騒ぎ出した。その騒動があたりいきこえて、県署から役人が出張して取調べると、右の一件だ。しかしその幽霊らしい者の姿はもう見えない。役人は引返してそれから県令けんれいに報告すると、県令はその俳優を呼出して更に取調べた上で、お前はもう一度、包孝肅の扮装をして舞台に出てみる、そうして、その幽霊のようなものが再び現れたらば、ここの役所へ連れて来いと命令した。」

「幽霊を連れて来いは、無理だね。」

「もちろん無理だが、そこがシナのお役人だ。」と、K君は笑つた。「俳優も困つたらしい顔をしたが、お役人の命令に背くわけにはいかないから、ともかくも承知して帰つて、再び包孝肅の芝居をはじめると、幽霊はまた出て来た。そこで俳優は怖こわながら言い聞かせた。おれは包孝肅の姿をしているが、これは芝居で、ほんとうの人物ではない。おま

えは何か訴えることがあるなら、役所へ出て申立てるがよからう。行きたくばおれが案内してやると言うのと、その幽霊はうなずいて一緒について来た。そこで、県署へ行って堂に登ると、県令はどうしたと訊く。あの通り召連れてまいりましたと堂下を指さしたが、県令の眼にはなんにも見えない。県令は大きい声で、おまえは何者かと訊いたが、返事もきこえない。眼にもみえず、耳にもきこえないのであるから、県令は疑った。彼は俳優にむかつて、貴様は役人をあざむくのか、その幽霊はどこにいるのかと詰問する。いや、そこにおりますと言つても、県令には見えない。俳優もこれには困つて、なんとか返事をしてくれと幽霊に催促すると、幽霊はやはり返事をしない。しかし彼は俄かに立上がつて、俳優を招きながら門外へ出て行くらしいので、俳優はそれを県令に申立てると、県令は下役ふたりに命じてその跡を追わせた。幽霊のすがたは俳優の眼にみえるばかりで、余人には見えないのであるから、俳優は案内者として先に立つて行くと、幽霊は町を離れて野道にさしかかる。そうして、およそ数里、日本の約一里も行ったかと思うと、やがて広い野原に行き着いて、ひとつの大きい塚の前で姿は消えた。その塚は村で有名な王家の母の墓所であることを確かめて、三人は引つ返して来た。」

「幽霊は男だね。」と、わたしはまた訊いた。「男の幽霊が女の墓にはいったというわけ

だね。」

「それだから少しおかしい。県令はすぐに王家の主人を呼出して取調べたが、なんにも心当りはないと答えたので、本人立会いの上でその墓を発掘してみると、土の下から果して一人の男の死体があらわれて、顔色がんしよく生けるが如くにみえたので、県令はさてこそという気色きしよくでいよいよ嚴重に吟味したが、王はなかなか服罪しない。自分は決して他人の死骸などを埋めた覚えはない。自分の家は人に知られた旧家であるから、母の葬式には数百人が会葬している。その大勢のみる前で母の柩ひつぎに土をかけたのであるから、他人の死骸などを一緒に埋めれば、誰かの口から世間に洩れる筈である。まだお疑いがあるならば、近所の者をいちいちお調べくださいというのだ。」

「しかしその葬式が済んだあとで、誰かがまたその死骸を埋めたかも知れないじゃないか。」

「そこだ。」と、K君はうなずいた。「シナの役人だって、君の考えるくらいつちもの事は考えるよ。県令もそこに気がついたから、さらに王にむかって、おまえは墓の土盛りつちもの全部済むのを見届けて帰ったかと訊問すると、母の柩ひつぎを納めて、その上に土をかけるまでを見届けて帰ったが、塚全体を盛りあげるのは土工どこうに任せて、その夜のうちに仕上げたのである

と答えた。シナの塚は大きく築き上げるのであるから、柩に土をかけるのを見届けて帰るのがまず普通で、王の仕方に手落ちはなかったが、そうなると更に土工を吟味しなければならぬ。県令はその当時埋葬に従事した土工らを一勢よび出してみると、いずれも相貌兇悪の徒ばかりだ。かれらの顔をいちいち睨みまわして、県令は大きい声で、貴様たちはけしからん奴らだ、人殺しをしてその儘に済むと思うか、証拠は歴然、隠しても隠しおおせる筈はないぞ、さあまっすぐに白状しろと頭から叱り付けると、土工らは蒼くなつてふるえ出した。そうして、相手のいう通り、まっすぐに白状に及んだ。その白状によると、かれらは徹夜で王家の塚の土盛りをしていたところへ、ひとりの旅びとが来かかつて松明の火を貸してくれといった。見ると、彼は重そうに銀囊を背負っているの、土工らは忽ちに悪心を起して、不意に鉄の鋤をふりあげて、かの旅びとをぶち殺してしまつて、その銀を山分けにした。死体は王家の柩の上に埋めて、またその上に土を盛り上げたので、爾来数年のあいだ、誰も知らなかったというわけだ。」

「すると、幽霊はその旅びとだね。」と、わたしは言った。「しかし幽霊になって訴えるくらいなら、なぜ早く訴えなかつたのだらう。そうしてまた、舞台の上に現れるにも及ぶまいじゃないか。」

「そこにはまた、理屈がある。土工らは旅びとを殺して、その死体の始末をするときに、こうして置けば誰も覚るさとし気づかいはない。包孝肅のような偉い人が再び世に出たら知らず、さもなければとても裁判は出来まいといつて、みんなが大きい声で笑ったそうだ。それを旅びとの幽霊というのか、魂というのか、ともかくも旅びとの死体が聴いていて、今度この劇場で包孝肅の芝居を上演したのを機会に、その名判官の前に姿を現したのだろうというのだ。土工らも余計なことをしやべつたばかりに、みごと幽霊に復讐されたわけさ。シナにはこんな怪談は幾らもあるが、包孝肅は遠いむかしの人だからどうすることも出来ない。そこで幽霊がそれに扮する俳優の前に現れたというのはちよつと面白いじゃないか。いや、話はこれからだんだんに面白くなるのだ。」

K君は茶をすすりながらにやにや笑っていた。雨はいよいよ本降りになつたらしく、岸の柳が枯れかかった葉を音もなしに振るい落しているのもわびしかつた。

二

わたしは黙つて茶をすすっていた。しかし今のK君の最後のことばが少し判らなかつた。

包孝肅の舞台における怪談はもうそれで解決したらしく思われるのに、彼はこれから面白くなるのだという。それがどうも判らないので、わたしは表をながめていた眼をK君の方へむけて、更にそのあとを催促するように訊いた。

「そうすると、その話は済まないのかね。何かまだ後談こうだんがあるのかね。」

「大いにあるよ。後談がなければ詰まらないじゃないか。」と、K君は得意らしくまた笑った。「今の話はここへ来たので思い出したのさ。その後談はこの西湖のほとりが舞台になるのだから、そのつもりで聴いてくれたまえ。その包孝肅に扮した俳優は李香とかいうのだそうで、以前は関羽かんうの芝居を売物にして各地を巡業していたのだが、近ごろは主として包孝肅の芝居を演じるようになった。そうして広東の三水県へ来て、ここでも包孝肅の芝居を興行していると、前にいったような怪奇の事件が舞台の上に出しゅつ来たいして、王家の塚を発掘することになったのだ。土工の連れん累るい者は十八人というのであるが、何分にも数年前のことだから、そのうちの四人はどこかへ流れ渡ってしまつて行くえが判らない。残っている十四人はみな逮捕されて重い処刑が行われたのはいうまでもない。たとい幽霊の訴えがあつたにもせよ、こうして隠れたる重罪犯を摘発し得たのは、李香の包孝肅によるのだからというので、県令からも幾らかの褒美が出た。王の家でも自分の墓所に他人の死

体が合葬されているのを発見することが出来たのは、やはり李香のおかげであるといつて、彼に相当の謝礼を贈った。県令の褒美はもちろん形ばかりの物であったが、王家は富豪であるからかなりの贈り物があったらしい。」

「こうなると、幽霊もありがたいね。」

「まったくありがたい。おまけにそれが評判になつて、包孝肅の芝居は大入りというのだから、李香は実に大当りさ。李香の包孝肅がその人物を写し得て、いかにも真に迫ればこそ、冤鬼えんきも訴えに来たのだらうということになると、彼の技芸にも箔はくが付くわけで、万事が好都合、李香にとつては幽霊さまさまと拝み奉つてもよいくらいだ。彼はここで一カ月ほども包孝肅を打ちつづけて、懐ろをすつかり膨ふくらせて立去つた——と、ここまでの事しか土地の者も知らないらしく、今でもその噂が炉畔の夜話に残っているそうだが、さてその後談だ。それから李香はやはり包孝肅を売物にして、各地を巡業してあるくと、広東の一件がそれからそれへと伝わつて——もちろん、本人も大いに宣伝したに相違ないが、到るところ大評判で興行成績も頗すこぶるいい。今までは余り名の売れていない一個の旅役者に過ぎなかつた彼が、その名声も俄かにあがつて、李香が包孝肅を出しさえすれば大入りはきつと受合うあひいということになつたのだから偉いものさ。こうして三、四年を送るあいだに、

彼は少からぬ財産をこしらえてしまった。なにしろ金はある。人気はある。かれは飛ぶ鳥も落しそうな勢いでこの杭州へ乗込んで来ると、ここの芝居もすばらしい景気だ。しかし、人間はあまりトントン拍子にいくと、とかくに魔がさすもので、李香はこの杭州にいるあいだに不思議な死に方をしてしまった。」

「李香は死んだのか。」

「それがどうも不思議なのだ。李香はこの西湖のほとりの、我れわれがさつき参詣して来た蘇小小の墓の前に倒れて死んでいたのだ。からだには何の傷のあともない。ただ眠るが如く死んでいるのだ。さあ、大騒ぎになったのだが、彼がなぜこんなところへ来て死んでしまったのか、一向に判らない。なにしろ人気役者が不思議な死に方をしたのだから、世間の噂はまちまちで、種々さまざまの想像説も伝えられたが、もとより取留めた証拠がある訳ではない。しかしその前日の夜ふけに、彼が凄いほど美しい女と手をたずさえて、月の明かるい湖畔をさまよっていたのを見た者がある。それはこの西湖の画舫の船頭で、十日ほど前に李香は一座の者五、六人とここへ来て、誰もができるように画舫に乗って、湖水のなかを乗りまわした。人気商売であるから、船頭にも余分の祝儀をくれた。殊にそれが当時評判の高い李香であるというので、船頭もよくその顔をおぼえていたのだ。その李香

が美しい女と夜ふけに湖畔を徘徊している——どこでも人気役者には有勝ちのことだから、船頭も深く怪しみもしないで摺れちがつてしまったのだが、さて、こういうことになる、それが船頭の口から洩れて、種々のうたがいがその美人の上にかかって来た。」

「それは当りまえだ。そこで、その美人は何者だね。」

「まあ、待ちたまえ。急せいちやあいけない。話はなかなか入り組んでいるのだから。」と、K君は焦じらすように、わざとらしく落ちつき払はつていた。

秋の習いといいながら、雨は強くもならず、小やみにもならない、さつきから殆んど同ひるじょうな足並あしなみでしとしと降りつづけている。午ひるをすぎてまだ間もないのに、湖水の上は暮れかかったように薄暗くけむっていた。

「李の死んだのはいつだね。」と、わたしは表をみながら訊いた。

「むむ。それを言い忘れたが、なんでも春のなかばで、そこらの桃の花が真まつ赤あかに咲いて、
おいおい踏つみ青あおが始はまろうとうという頃ころだった。そうだ、シナ人の詩にあるじゃないか——孤こ
ふんなんぞかんせんじじよのこと、
踏とう青せい争あら上そつ岳のぼる王がく墳おうのふん——
憤ふん何なん関ぞ児かん女せん事じよのこと、
踏とう青せい争あら上そつ岳のぼる王がく墳おうのふん——
丁度ていどまあその頃ころで、場面は西湖、

時候は春で月明の夜というのだから、美人と共に逍遙するにはおあつらえむきさ。しかしその美人に殺されたらしいのだから怖ろしい。勿論、殺したという証拠があるわけでもな

し、死体に傷のあともないのだから、確かなことはいえた筈ではないのだが、誰がいうともなしに李香はその女に殺されたのだという噂が立った。いや、まだおかしいのは、その女は生きた人間ではない。蘇小小の霊だというのだ。」

「また幽霊か。」

「シナの話には幽霊は付き物だから仕方がない。」と、K君は平気で答えた。「蘇小小というのは君も知っているだろうが、唐代で有名な美妓で、蘇小小といえは芸妓などの代名詞にもなっているくらいだ。その墓は西湖における名所のひとつになっていて、古来の詩人の題詠も頗る多い。その蘇小小の霊が墓のなかから抜け出して、李をここへ誘ってきたというのだ。つまり、蘇小小が李香という俳優に惚れて、その魂が仮りに姿をあらわして、たくみに李を誘惑して、共に冥途へ連れて行ったというわけだ。剪燈新話せんとうしんわや聊齋志異りようさいしがひろく読まれている国だから、こういう想像説も生れて来そうなことさ。相手がいよいよ幽霊ときまれば、どうにも仕様がな。船頭がいう通りに、果して凄**い**ほどの美人であるとすれば、あるいは蘇小小の霊かも知れない。そこで李が美人の靈魂にみこまれて、その墓へ誘い込まれたとなれば、いかにも詩的であり、小説的であり、西湖佳話に新しい一節を加くわうことになるのだが、さすがに役人たちはそれを詩的にばかり解釈することを好

まないの、それぞれに手をわけて詮議をはじめると、李はその夜ばかりでなく、すでに二、三度もその怪しい美人と外出したらしいということが判った。彼は芝居が済んでから旅宿をぬけ出して、夜の更けるまで何処かをさまよい歩いて来る。今から考えれば、その道連れがかの美人であつたらしいと、同宿の一座の者から申立てた。そうなる、かの船頭ばかりでなく、李がかの美人と歩いてたのを俺も見たという者が幾人も現れて来た。

中には美人が笛を吹いていたなどという者もあつて、この怪談はいよいよ詩的になつて来たが、どこまで本当だか判らないので、役人はともかくその美人の正体を突き留めようと苦心していた。座頭ざがしらの李香がいなくなつては芝居を明けることは出来ない。無理に明けたところで観客の来る筈もない。座頭を突然にうしなつたこの一座はほとんど離散の悲境に陥つてしまつたが、何分にもこの一件が解決しない間は、むやみにここを立去ることも出来ないの、一座の者は代るがわるに呼出されて、役人の訊問を受けていた。実に飛んだ災難だが、どうも仕方がない。」

「一体、その李というのは幾つぐらいで、どんな男なのだね。」と、わたしは一種の探偵的興味に誘われてまた訊いた。

「年は三十四、五で、まだ独身であつたそうだ。たとい田舎廻りにもしろ、ともかくも座

頭を勤めているのだから、背もすらりとして男振りも悪くない。舞台以外にはどちらかうと無口の方で、ただ黙って何か考えているという風だったと伝えられている。しかし相次に親切の気のある男で、座員の面倒も見やする。現に自分の子ともつかず、奉公人ともつかずに連れ歩いている崔英さいえいという十五、六歳の少女は、五、六年前に旅先で拾つて来たのだそうで、なんでも李が旅興行をして歩いているうち、その頃は今ほどの人気役者ではなかつたので、田舎の小さな宿屋にくすぶつていて、そこに泊り合せた親子づれの旅たび商人びあきんどがあつて、その親父の方は四、五日わずらつて死んだ。その病中、李は親切に世話をしてやつたので、親父も大層よろこんで、死にぎわに自分のあとの事をいろいろ頼んだ。そうだ。頼まれて引取つたのがその娘の崔英で、まだ十一か二の小娘であつたのを、自分の手もとに置いて旅から旅を連れてあるいていて、というのだ。一事が万事、まずこういう風であるから、彼は蘇小小の靈に誘われて死んだということにして置けば、まことに詩的な美あるから、彼は蘇小小の靈に誘われて死んだということにして置けば、まことに詩的な美しい最期となるのであつたが、意地のわるい役人たちはどうもそれでは気が済まないと思つて、さらに一策を案じ出した。勿論、最初から湖畔の者に注意して、何か怪しい者を見たらばすぐに訴え出ると申付けてはおいたのだが、別に二人の捕吏ほりを派出して、毎晩かの

蘇小小の墓のあたりを警戒させることにした。」

「誰でも考えそうなことだね。」と、わたしは思わず笑った。

「誰でも考えそうなことをまず試みるのが本格の探偵だよ。」と、K君は相手を弁護するように言った。「見たまえ。それが果して成功したのだ。」

三

少しやり込められた形で、わたしはぼんやりとK君の顔をながめていると、彼はやや得意らしく説明した。

「二人の捕吏が蘇小小の墓のあたりに潜伏していると、果してそこへ二つの黒い影があらわれた。宵闇ではあるが、星あかりと水あかりで大抵の見当は付く。その影はふたりの女と判ったが、その話し声は低くてきこえない。やがて二つの影は離れてしまいそうになったので、隠れていた捕吏は不意に飛出して取押えようとすると、ひとりの女はなかなか強い。忽ちに大の男ふたりを投げ倒して、闇のなかへ姿を隠してしまったが、逃げおくれた一人の女はその場で押えられた。よく見ると、それは十五、六歳の少女で、前にいった崔

英という女であることが判つたので、捕吏はよろこび勇んで役所へ引揚げた。こうなると、少女でも容赦はない。拷問して白状させるといふ意気込みで嚴重に吟味すると、崔英は恐れ入つて逐一白状した。まずこの少女の申立てによると、かの広東における舞台の幽霊一件は、まったく李香のお芝居であつたそうだ。」

「幽霊の一件は嘘か。」

「李がなぜそんな嘘を考え出したかというと、崔の父の旅商人というのは、さきに旅人をぶち殺してその銀囊を奪い取つた土工の群れの一人であつたのだ。彼は分け前の銀かねをうけ取ると共に、娘を連れてその郷里を立去つて、その銀を元手に旅商人になつたが、比較的正直な人間とみえて、昔の罪に悩まされてその後はどうもよい心持がしない。からだもだんだん弱つて来て、とうとう旅の空で死ぬようになった。その時かの李香が相宿あいやどのよしみで親切に看病してくれたので、彼は死にぎわに自分の秘密を残らず懺悔ざんげして、自分は罪のふかい身の上であるから、こうして穩かに死ぬことが出来れば仕合せである。ただ心ばかりは娘のことで、父をうしなつて路頭ろとうに迷うであろうから、素姓の知れない捨子を拾つたとおもつて面倒をみて、成長の後は下女にでも使つてくれと頼んだ。李はこころよく引受けて、孤児みなしごの娘をひき取り、父の死体の埋葬も型のごとくに済ませてやつたが、ここ

でふと思いついたのが舞台の幽霊一件だ。崔の父から詳しくその秘密を聞いたのを種にして、かれは俳優だけにひと狂言書こうと思いついたらしい。王の家をたずねて、お前の母の塚には他人の死骸が合葬してあると教えてやったところで、幾らかの謝礼を貰うに過ぎない。むしろそれを巧みに利用して、自分の商売の広告にした方がましだと考えたので、今までは関羽を売りものにしていた彼が俄かに包孝肅の狂言を上演することにした。そうして広東の三水県へ来て、その狂言中に幽霊が出たといい、またその幽霊が墓のありかを教えたといい、細工は流々、この狂言は大当りに当って、予想以上の好結果を得たというわけだ。さつきも話した通り、かの幽霊は李香の眼にみえるばかりで、余人の眼にはちつとも見えなかつたというのも、あとで考えれば成程とうなずかれるが、その時はみんな見事に一杯食わされたのだ。そこで、彼は県令から御褒美を貰い、王家から謝礼を貰い、それから俄かに人気を得て、万事がおもう壺に嵌ったのだが、やはり因果応報とでもいうか、彼は崔の父によつてその運命をひらいたと共に、崔のために身をほろぼすことになつてしまつたのだ。」

「では、その娘が殺したのか。」と、わたしは少し意外らしく訊いた。「たとい李という奴が大山師であろうとも、崔にとつては恩人じゃないか。」

「もちろん恩人には相違ないが、李も独身者だ。崔の娘がまだ十三、四のころから關係をつけてしまつて、妾のようにしていたのだ。崔も自分の恩人ではあり、李に離れては路頭に迷うわけでもあるから、おとなしく彼にもてあそばれていたのだが、その一座に周という少年俳優がある。これも孤児で旅先から拾われて来たものだが、容貌がよいので年の割には重く用いられていた。崔と周とは同じような境遇で、おなじような年頃であるから、自然双方が親密になつて、そのあいだに恋愛關係が生じて来ると、眼のさとい李は忽ちにそれを看破して、揃いも揃つた恩知らずめ、義理知らずめと、彼はまず周に対して残酷な仕置を加えた。彼は崔の見る前で周を赤裸にして、しかも両手を縛りあげて、ほとんど口にするからざる暴行をくり返した。それが幾晩もつづいたので、美少年の周は半病人のようにやつれ果ててしまつたが、それでも舞台を休むことを許されなかつた。それを見せつけられている崔は悲しかった。自分もやがては周とおなじような残酷な仕置を加えられるかと思うと、それも怖ろしかった。」

「なるほど、そこで李を殺す気になつたのだね。」

「いや、それでも崔は少女だ。さすがに李を殺そうという気にはなれなかつたらしい。さりとしてこの儘にしていれば、周は責め殺されてしまうかも知れないので、彼女は思いあま

つて一通の手紙をかいた。すなわち自分の罪を深く詫びた上で、その申訳に命を捨てるから、どうぞ周さんをゆるしてくれ。周さんが悪いのではない、何事もわたしの罪であるというような、男をかばった書置を残して崔はある夜そつと旅館をぬけ出した。そのゆく先はこの西湖で、彼女は月を仰いで暫く泣いた後に、あわや身を投げ込もうとするところへ、不意にあらわれて来たのが、かの蘇小小の霊といわれる美人だ。美人は崔をひきとめて身投げの子細をきく。それがいかにも優しく親切であるので、年のわかい崔はその女の腕に抱かれながら一切の事情を打明けた。それが今度の問題ばかりでなく、過去の秘密いっさいをも語ってしまったらしい。それを聞いて、女はその美しい眉をあげた。そうして、崔にむかつて決して死ぬには及ばない。わたしが必ずおまえさん達を救ってやるから、今夜は無事に宿へ帰つてこの後の成行きを見ていろと誓うように言った。それが嘘らしくも思われないので、崔は死ぬのを思いとどまって素直にそのまま帰つてくると、その翌日、かの女は李の芝居を見物に来て、楽屋へ何かの贈り物をした。それが縁になって、どういふ風の話が付いたのか、李はかの女に誘い出されて、二度までも西湖のほとりへ行つたらしい。三度目に行つたときに、おそらく何かの眠り薬でも与えられたのだろう、蘇小小の墓の前に眠つたままで、再び醒めないことになってしまったのだ。そういう訳だから、崔は

その下手人を大抵察しているものの、役人たちの調べに対して、なんにも知らない顔をしていると、その日の夕方、誰が送ったとも知れない一通の手紙が崔のところへ届いて、蘇小小の墓の前へ今夜そつと来てくれとあるので、崔はその人を察して出て行くと、果してかの女が待つていた。」

「その女は何者だね。」

「それは判らない。女は崔にむかつて、わたしも蔭ながら成行きを窺っていたが、李の一件もこれで一段落で、もうこの上の詮議はあるまい。座頭の李が死んだ以上、おまえの一座も解散のほかはあるまいから、これを機会に周にも俳優をやめさせて、二人が夫婦になって何か新しい職業を求める方がよからう。わたしもここを立去るつもりだから、もうお前にも逢えまいと言った。崔は名残り惜しく思ったが、今更ひき留めるわけにもいかない。せめてあなたの名を覚えて置きたいといったが、女は教えなかった。わたしは世間で言いふらす通り、蘇小小の霊だと思つていてくれればいいと、女は笑つて別れようとする途端に、かの捕吏があらわれて来た……。これで一切の事情は明白になったのだが、崔が果して李香殺しに何の關係もないのか、あるいはかの女と共謀であるのか、本人の片口だけではまだ疑うべき余地があるので、崔はすぐに釈放されなかつた。すると、ある朝のことだ。

係りの役人が眼をさますと、その枕もとに短い剣と一通の手紙が置いてあつて、崔の無罪は明白で、その申立てに一点の詐りいっわもないのであるから、すぐ釈放してくれと認めてあつた。何者がいつ忍び込んだのか勿論わからないが、その剣をみて、役人はぞつとした。ぐずぐずしていれば、おまえの寝首を搔くぞという一種の威嚇いかくに相違ない。ここまで話せば、その後のことは君にも大抵の想像はつくだろう。李の一座はここで解散した。崔と周とは手に手をとつてどこへか立去つた。」

「その結末はたいい想像されるが、その女は何者だか判らないじゃないか。」

「それは女侠というもので、つまり女の侠客だ。」と、K君は最後に説明した。「日本で侠客といえばすぐに幡随院長兵衛のたぐいを連想するが、シナでいう侠客はすこし意味が違う。勿論、弱きを助けて強きを挫くくじという俠気も含まれているには相違ないが、その以外に刺客しかくとか、忍びの者とか、劍客とかいうような意味が多量に含まれている。それだけに、相手にとつては幡随院長兵衛などより危険性が多いわけだ。侠客が世に畏れられるのはそこにある。崔を救つた女も一種の女侠であることは、美人の織手せんしゅで捕吏ふたりを投げ倒したのや、役人の枕もとへ忍び込んで短剣と手紙を置いて来たのや、それらの活動をもても容易に想像されるではないか。シナの侠客のことはいろいろの書物に出ている。知

らないのは君ぐらいのものだ。しかしその侠客すなわち劍俠、僧俠、女俠のたぐいが、今もあるかどうかは僕も知らない。いや、あまり長話をしていては、この家も迷惑だろう。そろそろ出かけようか。」

わたし達はふたたび画舫の客となって、雨のなかを帰った。

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の夢」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年4月20日初版1刷発行

初出：「現代」

1927（昭和2）年8月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：花田泰治郎

2006年5月7日作成

2007年5月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女侠传

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>